第５章 わからないことはそのままにしない

しっかりとしたレポートを作成する場合、文献を検索するために、大学の Web システムやサービスを必ずといってよいほど利用することになります。しかし、慣れていないと、パソコンやスマホの操作、システムの問題に直面し、上手く利用できないことがあります。そうしたときに、大事なのは「わからないことはそのままにしない」という意識です。

例えば自宅で文献検索を利用出来なかった時や、データベースをうまく利用できない時は、正しい使い方や手順をよくある質問集や使い方ガイドで調べることで解決できる場合もあります。また、システムの問題であれば、データベースや大学全体のメンテナンスや仕様変更の可能性もあり、ニュースやお知らせ欄で確認できる場合もあります。できなかったと諦めず、自分で解決できそうなことがないかまず調べて下さい。そして、大学のサービスや Web システムは必ずサポートしてくれるところがあるので、利用すると良いでしょう。

課題レポートを提出するまでに困ったことがあれば、内容別に相談できる場所が大学にあります。利用できるサービスはないか、名称や内容、問い合わせ方法などの最新情報を大学の Web サイトで確認しましょう。次の項目で詳しく説

明するレポート相談の強い味方「**サポートデスク**」もその一つです。わからないことがあったら、ひとりでかかえず、周りの人や TA、対応してくれるデスクに尋ねましょう。本章の最後には「**課題レポートチェックリスト**」と「**レポートによく見られる失敗と改善方法**」を添えました。自分で確認できそうなことや、注意できそうなことを集めたので、見直す際に、ぜひ前章も読み返しながら、活用して下さい。わからないことは放置せず、自分で調べたり、相談したり、理解を深めて、大学で必要なスキルを徐々に身につけていってください。

サポートデスク

図書館には、レポートや学習についてわからないことを相談できる場所があります。中央図書館のサポートデスクには、大学院生のスタッフが**平日 15 時から 19 時**の間、カウンターで簡単な質問や学習相談に対応しています。サークルや SNS で知り合った大学の先輩に相談する手もありますが、サポートスタッフは普段からレポート作成のための関連知識を深めており、それらを総動員して皆さんの質問に答えます。

相談方法は予約なしの**対面相談**と**オンライン相談**（予約制）があります。特設テーブルやオンライン上で相談を受けるイベントも年に数回開催しています。

図書館の施設の使い方や附属図書館 Web サイトの見方や利用手順も聞けます。レポートや発表の相談ももちろんできます。例えば「引用がちゃんとできているか不安だ」「先生に見せる前にちょっと一緒にみて欲しい」などの相談でも構いません。基礎科目レポートといっても内容については指導教員に尋ねましょう。書き方や構成、表現などはアドバイスできます。赤ペンで添削はできませんが、皆さんと一緒に不安なことを解決するお手伝いをしています。相談を経て自分で直せるようになったり、気づけるようなったりできるようなサポートを目指しています。書いた文章を何度も読んだり、日を変えて読んだりするとミスに気づくこともあります。実は自分でも気づけたかもということもありますが、気軽に声をかけてください。あっているか不安で確かめたいことでも大丈夫です。

毎年 4 月には新入生対象の「**これだけ講座**」を開催しています。開催方法は年度によって異なりますが、名古屋大学に所属していれば 、オンデマンド版の動画をいつでも見ることができます。スタッフが丁寧に解説しているので、見たいコンテンツを選んでみてください。本書はこの講座を元に作成したので、もう一度内容を振り返ったり、レポート作成のためにいつでも読んだりできる参考書として「**アカデミックスキルズ 大学生ならこれだけは知っておきたいキホン**」を使ってください。3、4 年生の頃には、卒業論文の執筆者を対象とした「**卒論講座**」で、初めての研究論文を書く時にも、サポートするので安心してください。

サポートデスクの対応言語は、日本語の他に英語と中国語の 3 言語あり、毎日 3 名のスタッフが常駐しています。各言語のスタッフは文献検索、アカデミックライティングやプレゼンなどの講座をそれぞれの言語で担当しています。英中スタッフは日本語でも対応しているので、英語スタッフに英語で書くレポートや論文を相談できますし、中国語を勉強している人は、中国語スタッフに発音のアドバイスをしてもらうのも良いかもしれません。また、多言語対応をいかし「**Let's talk in English!** 」や「**中国で話そう！**」という会話練習のワークショップを不定期で開催しています。外国語を勉強していても、なかなか話す機会が日常にないですよね。留学生スタッフとクイズやゲームをしたり、身近なテーマで話したりなどの楽しいイベントを毎回用意しているので、会話力アップに是非参加してください。

「先輩の役に立った本を教えて欲しい」という要望もよくありますが、2 階のライティング関連図書コーナーでは、季節ごとの**企画図書展示**をしています。サポートデスクの横にあるレポートの書き方や発表の指南書がまとまっている場所なので、その場で自分に合う参考書を見つけることもできます。このエリアの本はみんなで使う図書なので借りられませんが、貸出し用の図書はだいたい 3 階の書架にあり、同じ請求記号（本の背表紙のシール）の図書を探して下さい。何を読んだらいいか迷うときは、展示の図書リストを参考にしたり、サポートス

タッフに聞いたりしてください。レポートや卒論などのライティング系の図書展示のほかに、サポートスタッフが自分の分野の入門書を紹介するポスター展示も時々しています。英語学習を提案する展示やライフハックを紹介する展示もあります。勉強の合間に是非立ち寄ってください。

講座や本の紹介の他に、もっと身近な情報の置き場所がないかと、2021 年から **note での情報発信**を始めました。名古屋大学附属図書館 サポートデスク の公式ページ（https://note.com/nulibss)のマガジン**【新入生向け・知っておきたいアカデミックスキル】**では、高校までには習わなかったけれども、大学で必要となる基本のアカデミックスキルを紹介しています。他にも外国語学習や名大図書館活用術など、気軽に読める短い記事がたくさんあるので、隙間時間や移動中などにでもよかったら読んでみてくださいね。

サポートデスクの**公式 Twitter(@NagoyaUnivLibSD)**では、講座やワークショップなどのお知らせやイベントの案内をしています。中央図書館の休みの日や重要なニュースもツィートしているので、普段見ている SNS からも情報をのがさず、リアルタイムに知ることができます。ぜひフォローしてください。

執筆中と提出前の見直し

課題レポートチェックリスト

※ 書いている途中、また書き終えた後に、くりかえしチェックして直しましょう

体裁

- ☐ 学籍番号、講義名、氏名、タイトルが記入されているか
- ☐ 指定された分量は守られているか
- ☐ （選択式の課題の場合）どれを選択したか明記されているか

内容

- ☐ タイトルは内容を過不足なく表現しているか
- ☐ 課題に適合した問いが立てられているか
- ☐ 問いが手におえるサイズに設定できているか
- ☐ 問いが明確に示されているか
- ☐ 問いに対する答えが書かれているか
- ☐ 答えが導き出される論拠が示されているか
- ☐ 自分の論証の限界が示されているか
- ☐ 適切な文献から引用がなされているか
- ☐ 文献の示し方、注のつけ方が領域のルールに則っているか
- ☐ オリジナリティはあるか（他の研究との差異によって独創性を示しているか）
- ☐ 容易に想像できる反論について対策ができているか
- ☐ 基本概念を正しく理解しているか、専門用語の使い方を間違えていないか
- ☐ 講義内容を理解していることが示されているか

ことばづかい・表記方法

- ☐ レポートにふさわしくない言葉が使われていないか
- ☐ 専門用語の使い方は正確か
- ☐ 略称が多すぎないか
- ☐ 文がねじれていないか
- ☐ 誤字脱字がないか
- ☐ 数字や英単語の全角/半角が統一されているか
- ☐ パラグラフの変わり目の字下げにミスはないか
- ☐ 指示語が多すぎないか
- ☐ 形容詞・副詞が多すぎないか

レポートによく見られる失敗と改善方法

新入生の中にはレポートの執筆経験が無い方も多いでしょう。そのため書き方が分からず、思いついたままに書き失敗してしまう、ということが多々あります。ここではレポートによく見られる失敗と、その改善方法について説明しています。

レポート失敗例１～４では、様々な問題が含まれる文章を例示しています。そして、失敗例に対して、問題点と改善案、改善例をそれぞれ提示しています。問題点と改善案においては具体的な問題とその改善方法を、改善例では改善案を活かした文章を提示しています。失敗例、問題点と改善案、改善例、と順を追って読んでみれば、レポートにおける文章のイメージがつかめるはずです。

レポート執筆中に何か困ったことがあれば、附属図書館 2 階にあるサポートデスク（ラーニングコモンズ）に相談しに行きましょう。サポートデスクでは大学院生のスタッフがレポートに関する様々な相談に乗っています。そもそも書き方が分からない、という初歩的な問題でも構いませんので、レポートの執筆で困難に直面した際は、遠慮なくサポートデスクに行ってみましょう。

レポート失敗例１

「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があるように単独個人で考えるよりも集団で討議するほうが優れた知恵が浮かぶという考えがある。話し合いによる集団意思決定の利点として、1. 民主的決定ができ、集団に属する構成員の決定に対する満足感が高い。2. 創造的な問題解決が可能になり、個人では思いつかない考えが創発される。3. 相互にミスを補い、判断の妥当性が高くなり、最善の判断が行える。以上の３つがある。ブレーン・ストーミング（オズボーン、1953）という創造的問題解決課題における批判をしない許容的な雰囲気の中で自由な討論を行い独創的な考えを生み出す議会方式がある。テーラー（1958）のブレーン・ストーミングの効果に関する実験結果によると個人条件のほうが、アイディアの総数も独創的なアイディアの数も集団で討議する条件よりまさっている。このように集団意思決定より個人意思決定のほうがまさっているとする先行研究もある。集団の創造性を阻害する要因として、1. 集団になることによる動機づけの低下やコミュニケーションの労力が必要となるプロセス・ロス、2. 他者の発話をさえぎることの懸念により自分の意見が言えなくなる発話のブロッキング、3. 集団の他者をあてにして手を抜くフリーライダー、4. ネガティブな評価を受ける可能性に対する不安がある。

（以下略）

問題点と改善案

1. パラグラフ・ライティングができていない
   1つのパラグラフで主張は1つ。内容を整理して、必要があれば段落を分ける。

2. レポートの組み立てが論理的ではない
   内容につながりがない。話の展開がわかりやすくなるように組み立てる。

3. 引用が少ない
   客観的事実として明らかになっていることは文献を引用する。また、主張の根拠としても文献を引用する。

4. 文章を書くときのルールが守れていない
   引用の仕方が統一されていない。引用のルールを調べ、ルールに従って引用する。

改善例

人々は日常生活のなかでさまざまな意思決定を行っている。その日のご飯の献立のように個人で意思決定を行う場面に加えて、選挙のように集団で意思決定（以下、集団意思決定）を行っている。「三人寄れば文殊の知恵」ということわざにもあるように個人で考えるよりも集団で討議するほうが優れた知恵が浮かぶという信念がある。この人々が素朴に持つ信念は心理学的に裏付けることが可能なのだろうか。

集団意思決定を行う背景として、以下の 3 点が考えられる。1 点目は民意を反映した民主的な決定ができることである。民主的決定により集団に属する構成員の決定に対する満足感が高くなる。2 点目は創造的な問題解決が可能になることである。相互作用を通して個人では思いつかない考えが創発される。3 点目は個人で行うよりも集団で行うことで、相互にミスを補い判断の妥当性が高くなり最善の判断ができることである。

上記の集団意思決定への期待に反して、集団意思決定は必ずしも個人の意思決定より優れているわけではないことが明らかになっている。Taylor et al.（1958）は、創造的問題解決課題における、批判をしない許容的な雰囲気の中で自由な討論を行うことで、独創的な考えを生み出す議会方式であるブレーンストーミング（Osborn,1953）の効果に関する実験を行った。実験の結果、個人条件のほうが集団条件よりもアイディアの総数も独創的なアイディアの数も優れていることが明らかになっている。

集団のパフォーマンスを阻害する要因として、集団意思決定における社会的影響がある。Sherif（1935）は、自分の判断に自信が持てない意思決定状況では、他者の判断をよりどころにすることで次第に集団の基準となる判断値へと意思決定が収束することを明らかにした。また、Asch（1955）は、自分の判断が正しいと思う状況でも、他のメンバーの回答の斉一性が高いと、他メンバーを意識することによって同調行動を取ることを示した。以上より集団のメンバーの存在によって行動が変化し、集団の意見の多様性が低下することで集団のパフォーマンスが低下すると考えられる。

（以下略）

レポート失敗例２

新型コロナウイルス感染拡大の影響―大学生の生活について

序論

コロナ禍は、私たちの生活を大きく変え、今なお様々な場面で影響を与え続けている。例えば大学の講義がオンラインとなったため入学後数回しかキャンパスに行っていない、仕送りが減ったにもかかわらずアルバイトを解雇されたなどが挙げられる。また、4 年間という期限がある大学生活の中で、留学や旅行などの計画が立てられないことはストレスとなる。新型コロナウイルス感染拡大から約 2 年が経ち、大学生が置かれている状況には様々な問題があることが浮き彫りになった。そこで本レポートでは、コロナ禍の今日、大学や大学生はどうあるべきかという問題について考察する。

本論

まずは文科省の調査結果から、大学生がオンライン講義をどのように受け止めているのか確認する。この調査では「満足」「ある程度満足」と回答した人が 56.9 パーセント、「あまり満足していない」「満足していない」と回答した人が 20.6 パーセントであった。オンライン講義をどちらかというと肯定的にとらえている人の割合が、オンライン講義を否定的にとらえる人の割合よりも多いという点は意外であった。（中略）

結論

オンライン講義に対して不満を感じている人よりも満足に感じている人のほうが多い点は、自分の感覚と違ったため驚いた。やはりきちんと根拠に基づいて判断しなければならないと反省した。コロナ終息以後も大学のあり方として、オンライン講義の活用は考えていくべき課題である。

問題点と改善案

1．【序論】：問題設定が大きすぎる
序論でコロナ禍の大学生をめぐる具体的な事例が挙げられているが、これら全てを踏まえて「大学や大学生はどうあるべきか」という問題に取り組むには、考えるべき項目が広がりすぎるためレポートとしては不適切。問題設定を限定し、レポートの分量で答えが出せる大きさにする。

2．【本論】：参照した資料名はきちんと明記する
「文科省の調査結果」とあるが、いつのものかどこからアクセスできるのかがわからない。

3．【本論】：「調査」の情報が不足している
アンケート調査やインタビュー調査などを参照する場合は、いつ、（対象者は）だれ、どこで、どのように行ったのかといった情報も示す。

4．【本論】【結論】：レポートには感想や反省は不必要。考察した内容を書く。

5．【序論】【結論】：「問題」と「結論」が一致していない
「コロナ禍の今日、大学や大学生はどうあるべきか」に対する答えが「コロナ終息以後も大学のあり方として、オンライン講義の活用は考えていくべき」となっており、問いと結論がかみ合っていない。問題点 1 を踏まえて、より具体的な問題設定に変更し、問題設定に合致する結論を出す。

6．【レポート全体】：レポートのタイトルと本文の内容が合っていない
本文内ではオンライン講義について言及するため、そのことがわかるようなタイトルをつける。

改善例

新型コロナウイルス感染拡大の影響―大学におけるオンライン講義の現状

序論

コロナ禍は、私たちの生活を大きく変え、今なお様々な場面で影響を与え続けている。特に大学では、小学校・中学校・高等学校などと比べても、いち早くオンライン講義が導入された。他の教育機関が対面講義を再開してもなお、オンライン講義と対面講義を併用するなど、大学におけるオンライン講義の実施率は高い。そこで本レポートでは、コロナ禍における大学のオンライン講義のあり方を、学生の立場から考察する。

本論

まずは文科省の調査結果(1)から、大学生がオンライン講義をどのように受け止めているのか確認する。この調査は、無作為に抽出した学生約 3,000 名を対象に、令和 3 年 3 月 5 日～27 日の期間において web サイトで回答を受け付け実施された。調査結果によると「満足」「ある程度満足」と回答した人が 56.9 パーセント、「あまり満足していない」「満足していない」と回答した人が 20.6 パーセントであった。オンライン講義をどちらかというと肯定的にとらえている人の割合が、オンライン講義を否定的にとらえる人の割合よりも多いのである。(中略)

結論

大学の講義がオンラインとなることに不満を感じる学生ばかりではないため、オンライン講義を活用する必要がある。一方で、友人と講義を受けられないことに対するつらさを抱えている学生の現状も見過ごしてはならない。(後略)

引用文献

（1）文部科学省「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（令和 3 年 5 月 25 日）」https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

レポート失敗例３

――前略――

まず、「貧困文化」では、「教育機会の格差」があるとされた。これによって確かに子どもたちの学力に差が生じることは納得がいくだろう。しかし、同時に「業績主義」だからこそ、本人の努力を考慮する必要があるのではないかと考えることができる。これについて、前章で述べた「文化再生産論」を振り返っておきたい。社会階層が支配階級（中流階級）の子どもは学校に親和的な文化資本を有しているが、労働者階級はそれを保持していない傾向が強い。つまり、学校に親和的でないことが議論されていた。つまり、本人が努力する一方で、その本人が学ぶ環境と非親和的であることは、少なからず結果に影響を及ぼすだろう。また、片岡（2011）によれば、親自身が受験志向や高学歴といった教育の高い層（あるいは社会階層が高い）である場合には、文化資本と勉強志向が高いということが、質問紙調査によって明らかにされている（p. 89）。さらに、中学受験を経験した母親ほど、読み聞かせ（読書文化資本）や、音楽や美術といった芸術文化資本をより多く子どもに経験させていた。つまり、このような母親による文化資本の伝達が行われている状態（相続文化資本）が明らかになったのである（pp. 89-90）。そして、子どもの受験率は、受験を経験し年収が高い親ほど、上昇する傾向にあった（p. 73）。こうして受験をより多く積み重ねていくことで、より高い学歴を志向し、それを子どもにも与える傾向があることがわかった。つまり一方で親が受験を経験せず家計が貧しい場合、その家庭では受験それ自体にあまり関心を抱いていないようにも捉えることができる。

このことから、「貧困文化」―「最終学歴」の関係性について、「貧困文化」は文化資本と結びつくことで教育機会の格差を生み出し、「最終学歴」に影響を与えているのだと考えられる。それでは「最終学歴」―「賃金格差」についてはどうだろうか。これについては学歴に対する生涯賃金の統計的研究（独立行政法人労働政策研究・研修機構 2017）が明らかにしている。

学歴	男性	女性
中学卒	1 億 9400 万円	1 億 3750 万円
高校卒	2 億 730 万円	1 億 4640 万円
高専・短大卒	2 億 1450 万円	1 億 7530 万円
大学・大学院卒	2 億 7000 万円	2 億 1670 万円

表 1 学歴別生涯賃金

出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構(2017)より

表 1 は学歴別にみた生涯賃金について、男性と女性を区別して明らかにされたものである。この表によれば、男性は、「中学卒」と「大学・大学院卒」でおよそ 8000 万円もの開きがみられる。これは女性も同様の結果となった。さらに注目しておきたいのは、「高校卒」と「大学卒」である。男性において、「中学卒」と「高校卒」ではおよそ 1000 万程度の開きであるが、「高校卒」と「大学卒」ではおよそ 6000 万円の開きがみられた。つまり、最終学歴が「高校卒」か「大学卒」かという違いによって、生涯賃金にこれほどの差が生じるのである。さらに、大学進学のために必要な経費は高校までとは比べものにならないことから、「教育機会の格差」によって妨げられる可能性が非常に大きいことが予想される。

問題点と改善案

1．「1 文 1 義」が守れていない。
　1 文で示す内容は 1 つまでにする。何個も「主語－述語」を置かない。

2．ひとつのパラグラフが長い。
　「パラグラフ・ライティング」を心がける。そのパラグラフで言いたいことを先に述べ（トピック・センテンス)、そのあとに詳しく説明していく。

3．接続詞が適切に使えていない。
　接続詞の「つまり」は【解説】や【要約】の意味を持っている。しかし、本例の「つまり」については、多用かつ誤謬であるため、前後の文章を確認して修正する必要がある。

改善例

まず、「貧困文化」では、「教育機会の格差」があるとされた。これによって確かに子どもたちの学力に差が生じることは納得がいくだろう。しかし、同時に「業績主義」だからこそ、本人の努力を考慮する必要があるのではないかと考えることができる。これについて、前章で述べた「文化再生産論」を振り返っておきたい。社会階層が支配階級（中流階級）の子どもは学校に親和的な文化資本を有しているが、労働者階級がそれを保持していない傾向が強い。つまり、学校に親和的でないことが議論されていた。つまり、本人が努力する一方で、その本人が学ぶ環境として非親和的であることは、少なからず結果に影響を及ぼすだろう。

↓

一部を書き換える。

↓

学力の差を論じるには、「貧困文化」の「教育機会の格差」だけではなく、子どもの社会階層と努力の関係に着目する必要がある。前章では、中産階級の子どもは学校文化に親和的であり、労働者階級がそうではないことを確認した。その状況を踏まえれば、子どもは等しく努力を求められるにもかかわらず、学ぶ環境と子ども自身との親和性が異なり、その差異が学力差を発生させると考えられる。つまり、「貧困文化」とは、「教育機会の格差」のみならず、努力が結果に結びつくかが社会階層に応じて変わるという「教育結果の格差」も生み出しているといえよう。

レポート失敗例４

課題：宮岡伯人著『エスキモー　極北の文化誌』岩波新書（1987）を読み、ブックレポートを作成しなさい。

第一章では筆者がユピック・エスキモーの「ことば」の研究の為、南西アラスカにフィールドワークに赴いた経験が述べられている。そこでは「インフォーマント」と呼ばれる、情報提供をしてくれる現地人の助けが必要となるそうである。一部にはインフォーマントを軽んじる研究者もいるが、現地の人々からオーソリティーとされるほどのインフォーマントのことばは、とても重要であるらしい。私は、インフォーマントから提供された情報を参考にすることが正しくないのではないかと思った。「土地の人たちが権威と考えている人からえられる情報は、やはり額面どおりにうけとめておくべきものと思われる」と筆者は言うけど、正しくないと思う。第二章では西と東－文化の地域差について語られており……

参考文献
宮岡伯人（1961）「エスキモー言語学の展望」
宮岡伯人（1987）『エスキモー　極北の文化誌』、岩波新書
宮岡伯人『「語」とはなにか　エスキモー語から日本語をみる』、三省堂、2002 年

問題点と改善案

１．レポートの体裁が取れていない。
アブストラクト・本文・まとめ・参考文献という一般的な論文の型に当てはめて執筆することを意識する。

２．論文で必須となる「論証」が欠けている。
レポートには論文と同様、自身の「主張」を裏付ける根拠を提示する「論証」が必要となる。特に根拠を提示せず「私は～と思う」と書くのは論文において大切な「客観性」が欠如しており、ただの主観的記述になってしまうので注意が必要。

３．書き言葉と話し言葉を混用している。
レポートに限らず文章に話し言葉を用いることは基本的にタブーであるため、書き言葉を使うことに慣れること。

4．「こそあど」といった指示代名詞が多く使用されている。
指示代名詞は何を指しているか分かりづらいため、できる限り使用しないようにすること。

5．引用が不適切にされている。
ルールに則った引用でない場合、剽窃行為にもなりかねないため、引用をする際は細心の注意を払うこと。

6．参考文献の書き方が不適切な上に統一されていない。
参考文献の記述方法は文献の種類（単行本や雑誌論文など）によって異なるため、文献の種類に合った適切な記述をすること。

改善例

本レポートは宮岡伯人著『エスキモー　極北の文化誌』（以下「本書」とする）第一章における筆者の「インフォーマント」の意見に特に耳を傾けるべきであるという主張を批判的に検討することを目的とする。

宮岡は「土地の人たちが権威と考えている人からえられる情報は、やはり額面どおりにうけとめておくべきものと思われる」（宮岡　1987, p14）と述べているが、この「権威」とされる人物の判断基準は「豊富で信用できる知識が傍目にもすぐ明らかになるばかりか、その提供する情報に自信をもっており、（何年かあとでもう一度、おなじ質問をしてもわかることだが）答えが首尾一貫している」（宮岡　1987, p13）という曖昧なものである。もしそうなら「インフォーマント」が「権威」たる所以は曖昧であり、ゆえに彼らが持っている情報が信用に値するか否かは判断し難い。

（以下略）

参考文献

宮岡伯人（1961）「エスキモー言語学の展望」、『民族學研究』、26 巻、1 号、pp.96-99
宮岡伯人（1987）『エスキモー　極北の文化誌』、岩波新書
宮岡伯人（2002）『「語」とはなにか　エスキモー語から日本語をみる』、三省堂